

J-26

都市港湾における海での空間体験のデザインとそれにより海への意識を改革する港の提案

Design of a space experience at sea in an urban port and proposal of a port that will reform the sea consciousness

佐藤信治¹, ○小林陽太²Shinji Sato¹, * Yota Kobayashi²

Currently, there are many problems surrounding the sea in Japan. There are various problems such as abandoned boat problem, plastic garbage problem, marine pollution, sea desertification, and decrease in the number of coastal ships. There are cases where these problems are becoming serious, and it can be confirmed in many cases that no concrete solution has been found or if no significant effect has been obtained even if countermeasures are taken.

It can be said that these problems are caused between the city and the sea. The main causes are people's neglect of the sea, low awareness of the sea, lack of knowledge of people, and such human factors may be the root cause of sea problems.

Therefore, in the current situation, (1) direct countermeasures against serious problems will become more necessary, and (2) there are human factors as described above that may be the cause of the problem. It may be considered that an approach to the sea problem from one viewpoint is necessary. The former has been studied from an engineering and scientific point of view, and some results have been recognized. There will be more cases where measures will be devised and improved. While the latter requires a mental and psychological approach, specific examples have been put in place and almost no successful examples can be confirmed.

I think that recognizing the attractiveness and familiarity of the sea in this situation can be a solution to this problem. Therefore, this proposal is presented as an aid to grasping the sea from a psychological aspect and as a way to associate the sea and the city in the future.

1.はじめに

現在,日本では海を取り巻く問題が数多く存在する. 放置艇問題,プラスチックゴミ問題,海洋汚染,海の砂漠化,内航船の人員減少問題など,あらゆる問題が挙げられる.そして,それらの問題は深刻化している場合もあり,具体的な解決策が見つからないものや,対策をしても大きな効果が得られていない場合も多く確認できる.

これらの問題は都市と海の間で引き起こされると言えるだろう.主な原因として考えられるのは,人々の海の軽視,海への意識の低さ,人々の知識不足などであり,このような人的要因こそが海の問題の根本の原因であることが大半である.

そこで,現状に対して,①海洋汚染を始めた海の環境問題への直接的な対策が更に必要になっていくという点,②問題の原因と考えられる上記のような人的要因が存在しているという点,2つの視点による海の問題へのアプローチが必要であると考えられる.前者は工学的・科学的な面からこれまで研究されており,一定の成果が認められている例もある.これからも対策が考案され,改善されるケースも増えるだろう.しかし,後者に対しては,精神的,心理的なアプローチが必要であるのに対し,具体的な策が打ち出され,成功を収めた例は確認できていない.

私はこの様な現状に対して,海の魅力や身近さを認

識させることがこの問題の打開策になり得ると考えている.そこで,心理的な側面から海を捉える手助けとして,都市における港を見直すことが必要不可欠であり,これからの海と都市の付き合い方を提示する.

2.基本方針

人の集まる都心における港の機能を拡張することで心理的なアプローチを行う.

現在の都市の海辺の機能に加えて,新しい機能を付随した総合的な港湾施設を考え,海を実感・体感できる港を設計する.

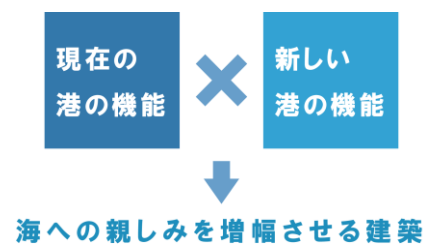


figure 1 : Conceptual diagram

3.計画背景

3.1 人々の「海離れ」が進行している

人々の海の軽視,海への意識の低さ,人々の知識不足などの背景には人々の海離れがある.下に示すグラフは「海も親しみを感ずるか」というアンケートの結果である.10代の4割,つまり2.5人に1人は,海への親しみをあまり感じていない,10代は42.5%,20代は36.3%.若年層ほど親しみを感ずっていない傾向にあると

1 : 日大理工・教員・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology, Nihon University.

2 : 日大理工・学部・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology, Nihon University.

ということがわかる.逆に50代,60代の4割の人は「親しみをを感じる」と回答している.

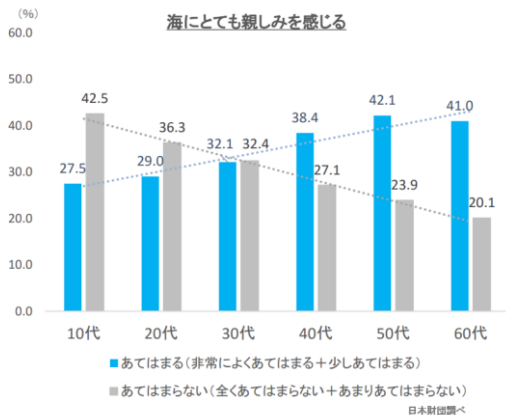


figure 2: Does the sea feel friendly ?

また、「子どもの頃(小学生のころ)どのくらいの頻度で海に遊びに行っていたか」の設問では,若い年代になるほど「日常的に」「年に2回以上」行っていた人の割合が減少.10代・20代は約6割が「年1日以下」となった.10・20代は「小学生の頃に海に遊びに行った日数が少ない」ということもわかる.

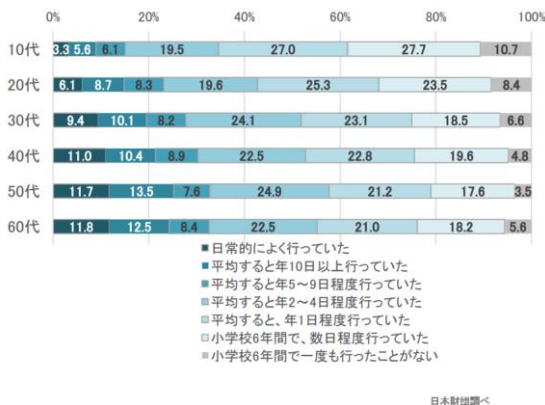


figure3:How often did you go to the sea when you were a child?

つまり,人々が海を重んじる意識の低下の理由,もとい海離れの理由は,海水浴のような「海を体験する機会」の減少が挙げられる.

3.2 海への意識と魚食文化の乖離

前項から分かる通り,海への意識は低くなっている.対して近年見られる市場のテーマパーク化や,「食育」の概念の浸透などの背景から分かるように,食に対する意識は高まっており,魚食文化を手段の一つとして海への意識の向上が可能であると考えられる.

4.基本計画

先のデータからもわかるよう,海水浴に魅力に感じない現代人にとっては,海を直に体験する機会自体がないと言っても過言ではない.それとは対称的に,都市

港湾や豊洲市場を始めとした漁港,ウォーターフロント群は,管理された空間かつ身近な空間によって現代の人々に人気を博している.しかし,そのような都市臨海は海を「景観」でしか消費を行っておらず,海を「体験する場」は極めて少なく,本当の意味での人と海の距離は遠いと言える.

そこで私は,港というものの概念の拡張をもとに以下を計画する.

4.1 本提案の機能

既存の機能

- (1)漁港機能
- (2)船舶係留機能
- (3)景観の保全機能

提案により追加される機能

- (4)海を実感・体験できる場
- (5)海を学ぶ場
- (6)地域性を取り入れた場

4.2 敷地選定

以上の機能・計画に必要な選定条件を以下に示す.

- (1)人が多く,大衆に影響を与えやすい都市港湾
- (2)人為的な海の問題が顕在化していること
- (3)港として一般的に認知されていること
- (4)海の景観のポテンシャルがあること

5.建築計画

以上により提案を行う.

敷地は先に述べた敷地条件により,都市漁港の代表とも言える豊洲市場周辺が適当であると考えられる.



都市における海水浴に代わるような海を実感・体感できる場の創出を行い,都市の臨海における新しい空間体験を提供し,人々の海に対する意識の改革を促すのが本提案の趣旨である.

参考文献

- [1] https://www.spf.org/opri/newsletter/57_2.html
- [2] https://kenchiku.co.jp/world_archive/084/index.html
- [3] <https://uminohi.jp/special/survey2019/>